

生涯を描いた。この劇団に対する評価の高まりは、クリエイティブ・スコットランドからの助成に現れた。3カ年の運営助成額が前年比101.7%という大幅増を記録したのである。

一方の、デザイナー兼演出家のステュアート・レイング (Stewart Laing) 率いるパフォーマンス・アートの集団アンタイトル・プロジェクトは、2013年から継続してのSNTとの共同製作による『ポール・ブライトの悪の誘惑 (Paul Bright's Confessions of a Justified Sinner)』のスウェーデン、アイルランドへのツアーとともに、パメラ・カーター (Pamela Carter) 作の新作『スロープ (Slope)』で芸術分野の垣根を越えるアバンギャルド気質を突きつけた。だが、この『スロープ』がアンタイトル・プロジェクトの20年以上にわたる活動の最後になりかねない事態が生じている。クリエイティブ・スコットランドは3カ年にわたる運営助成のリストからアンタイトル・プロジェクトの名前を消したのである。理事会は、解散こそ名言しないものの、オフィスの閉鎖と上演活動の中止を決めた。レイング自身はフリーランスのデザイナー、演出家として、さらなる活動の領域を探ることになる。世界的に評価の高い芸術家たちであっても活動を継続していくために不可欠な最低限の報酬が得られない環境は、残念ながら至るところにある。運営助成の本質的な問題である。クリエイティブ・スコットランドの助成制度のさらなる透明性を求める契機となるとともに、レイングのリベンジを期待したい。

#### なかやま・かおり

プロデューサー・翻訳/ドラマ教育アドバイザー。特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク代表理事、日本芸術文化振興会プログラムオフィサー、国際演劇協会理事。著書に『演劇と社会——英国演劇社会史』。翻訳戯曲に『ハンナとハンナ』『カラムとセフィーの物語』『宮殿のモンスター』他。



うずめ劇場「昔の関係」

[オーストリア/ドイツ]

## スキャンダルの都市三つ： ウィーン、ライプツィヒ、ベルリン

寺尾 格

2014年の最大の話題は、1741年以来の歴史と伝統を誇るウィーン・ブルク劇場 (Burgtheater) をめぐる泥沼の乱脈経営スキャンダルだろう。正月早々のウィーン・スタンダード紙面に、ブルク劇場の総監督マティアス・ハルトマン (Matthias Hartmann) が、会計担当の副支配人シルヴィア・シュタンテイスキー (Silvia Stantejsky) を無期限解雇。原因は巨額の赤字判明の責任であり、2009年にハルトマンがブルク劇場を引き継いだときには、すでに1500万ユーロの赤字が存在していたとの弁解に、前任者のクラウス・バッハラー (Klaus Bachler) は告訴も辞さない怒りの

反論。ただしこれは第一幕にすぎなかった。

第二幕は赤字責任の押しつけを拒否するシュタンテイスキーを、ブルク劇場アンサンブルの大多数が署名入りで支持して、逆にハルトマンの無責任ぶりを批判。観客数は増えたにもかかわらず、1900万ユーロもの赤字に増大させた責任は、むしろハルトマンにあるとして、文化大臣によって逆に解雇された。そして第三幕は、今度はハルトマンが解雇の撤回と、本来の任期である2019年までの未払い給与を求めて告訴。その裁判前日には、ブルク劇場を含む連邦劇場ホールディングの経営トップが辞任表明を行うありさまで、乱脈経営の責任問題はますます深いやぶの中に入り込んでいる。その結果、テアター・ホイテ誌(Theater heute)による2013/2014年のアンケート「怒りのベスト」部門では、ブルク劇場が圧倒的な人気ぶりであった。

暫定的に後任となったカリン・ベルクマン(Karin Bergmann)は、秋には正式にブルク劇場の歴史上初の女性総監督に就任。ドイツ生まれの彼女は、1986年にクラウス・パイマン(Claus Peymann)のスポークスマンとなって以来、1999年からパッハラー、2009年からはハルトマンの下で、一貫してブルク劇場に関わっていた経歴を持つ。「東欧諸国との連携を深めて、ヨーロッパの視点」を重視しつつ、「ブルク劇場は再び輝く」を合言葉に、「楽観視して再建に取り組む」と表明。

第二のスキャンダルが、これも伝統あるライプツィヒ大学の演劇研究所(Institut für Theaterinstitut, Universität Leipzig)を考古学研究所と共に閉鎖するとの予定が、1月末に大学当局から発表された。ザクセン州の教育予算削減のありである。寝耳に水のギュンター・ヘーグ教授(Günter Heeg)による異議申し立ての呼びかけに各界が反応。演劇誌や



ウィーン・ブルク劇場

新聞などに大きく取り上げられて、年末に発表された2014年のドイツ演劇ファウスト賞(Deutscher Theaterpreis DER FAUST)の特別賞は、ライプツィヒ大学演劇研究所という結果になった。

第三は、1814年に亡くなったイフラント(August Wilhelm Iffland)の遺稿のスキャンダルである。イフラントは、ゲーテの古典的で美的な朗唱の「ワイマールスタイル(Weimarer Stil)」に対して、むしろ非美的でリアルな「マンハイム風(Mannheimer Stil)」を主張した俳優・劇作家・劇場支配人で、ベルリンの国民劇場の土台を確立した演劇人である。6000通を超える遺稿を含む34巻本は、第二次大戦後に行方不明となっていた。これを国立オペラ座の瓦礫から救い出し、密かに所蔵していた演劇学者が5万ユーロでウィーンの本屋に売却。オークションに出される予定に対して、ベルリン市が所有権を求めて猛反発。結局、1万5千ユーロでベルリンに戻る事となった。

ベルリンではブレヒトの伝統のベルリーナー・アンサンブル劇場(Berliner Ensemble)で1999年から総監督であったクラウス・パイマンが2017年に退任することを表明。フランクフルト・シャウシュピール劇場(Schauspiel Frankfurt)のオリヴァー・レーゼ(Oliver Reese)が引き継ぎ、モーリッツ・リンケ(Moritz Rinke)が座付き作家となる。

パイマンと共に1986年にボーフムからウィーンに来て、その後ブルク劇場の看板俳優となったゲルト・フォス(Gert Voss)は、6月14日に72歳で死去。

予算削減の荒波の中、ドイツ舞台芸術協会(Deutscher Bühnenverein)は、「ドイツの演劇・オーケストラが歴史的に形成してきた芸術表現の独自の多様性」に対して、ユネスコの精神的遺産を申請すると発表。鑑定書には、「300年以上も継続した生きた伝統の演劇文化が、社会のあらゆる問題にフレキシブルに対応し、硬直化に抵抗する多様性を涵養<sup>かんよう</sup>」という趣旨の文言が見受けられる。

作品に目を向ければ、相変わらずエルフリーデ・イエリネク(Elfriede

Jelinek)の生産性がすさまじい。2010年に肺癌で亡くなったクリストフ・シュリンゲンジーフ(Christoph Schlingensief)のためにイェリネクの書いたテキストは、2009年にウィーン・ブルク劇場で初演された「レディメイド・オペラ」の『メア・クルパ(Mea Culpa)』などで一部分のみ利用されていた。残ったテキストを含む完全上演が『死・病氣.Doc(Tod-krank, Doc)』(ミルコ・ボルシュト[Mirko Borscht]演出、2013年12月2日初演、ブレーメン劇場[Theater Bremen])。死、無常、罪というテーマが六部構成で、地獄巡りの『神曲』のイメージと重ねられる。5名のゾンビがグロテスクに食い尽くされる身体を提示しつつ、現代批判をひたすら語り続ける。さらにニコラス・シュテーマン(Nicolas Stemann)演出の『ラインゴールド(Rein Gold)』(「ライン」はライン川[Rhein]と純粋な[rein]との掛詞、2014年3月9日初演)が、ベルリン空港と同様に延期続きの改築中のベルリン国立歌劇場の代わりのシラー劇場[Staatsoper im Schiller Theater]で上演。2012年にミュンヘン・プリンツレグンテン劇場(Prinzregententheater)で出入り自由のライブ朗読されたテキストを、フルオーケストラと歌手による「新しい音楽ヴァージョン初演」と銘打って、『ラインの黄金(Das Rheingold)』を序章とするワーグナーのオペラ『ニーベルングの指輪(Der Ring der Niebelungen)』の名曲に、マルクスとイェリネクの資本主義批判を重ね合わせ、あえて通俗化させた舞台に賛否両論。

同様に元気なのがガルネ・ポレシュ(René Pollesch)で、2014年だけでもチューリヒ、フランクフルト、ベルリン、シュトゥットガルト、それぞれで新作を演出し、さらにハンブルクで12月12日に初演した『ロッコ・ダーソウ(Rocco Darsow)』(ハンブルク・ドイツ・シャウシュピールハウス劇場[Deutsches Schauspielhaus Hamburg])は連日の満員御礼。これは人気俳優のマルティン・ヴトケ(Martin Wurtke)の魅力でもあるのだろうが、追加上演が決まったらしい。「あなたを愛している(Ich liebe dich.)」というキツキツな台詞は、実は言われた相手への抑圧となり、暴力ですらありうる……というような「考察」が、4人のヤリトリの中で様々に展開される。特

筆すべきは、観客を時に爆笑させ、時にホロリとさせ、納得や反発を引き起こしながら、「愛」の多義的な深さをユーモアと共に立ち上げる舞台ということで、出演した原サチコによれば、稽古中の討議によってテキストが毎日のように変化し、初日の3時間前まで確定しなかった。例えば松田聖子の「SWEET MEMORIES」を原サチコが歌うカラオケ場面は、全体のコンセプトを変えるほどに強い影響を与えたことである。

ちなみにハンブルクは、18世紀にレッシング(Gotthold Ephraim Lessing)が初の市民・国立劇場の試みを行って、ドイツ演劇史では時代を画する重要な都市である。「シャウシュピールハウス(Schauspielhaus)」とは「劇場」という意味でもあるので、ドイツのあちこちで見られる名称であるが、ハンブルクでは「ドイツ」を冠するのが正式名称である。昨年の秋シーズンから総監督となったカリン・バイアー(Karin Beier)の下、現在、最も注目されるラインナップを用意している劇場のひとつと言える。

1989年の東独解体の引き金となったのが、ライプツィヒの民主化運動である。それを8歳の子どもの視点から描いたのが、28歳の若手、ヴォルフラム・ヘル(Wolfram Höll)の『それから(Und dann)』(クラウディア・バイアー[Claudia Bauer]演出、2013年10月4日初演、ライプツィヒ・シャウシュピール劇場[Schauspiel Leipzig])で、激動する歴史に直面した日常に産まれる理解不能と不安を、詩的とも言えるモノログ断片で観客と共有して、ベルリン演劇祭その他での評価が高く、テアター・ホイテ誌のベストと若手ベストにも名前があがっている。ちなみに若手ベストは、フェルディナント・シュマルツ(Ferdinand Schmalz)の『バターの例にて(am

ハンブルクドイツ・シャウシュピールハウス劇場



beispiel der butter)』(チリー・ドレクセル [Cilli Drexel] 演出、2014年3月2日初演、ライブツィヒ・シャウシュピール劇場 [Schauspiel Leipzig]) で、オーストリアの酪農工場をめぐる同質化抑圧を描く民衆劇スタイル。

2012年にミュルハイム劇作家賞 (Mülheimer Dramatikerpreis) で観客賞となったフィリップ・レーレ (Philipp Löhle) の『もの (Das Ding)』(ヤン・フィリップ・グローガー [Jan Philipp Gloger] 演出、2011年5月14日、ハンブルク・シャウシュピールハウス劇場 [Deutsches Schauspielhaus Hamburg] 初演) は、グローバル化する経済社会を笑いのめすカリカチュアで、ドイツを超えた人気作となっている。2015年6月には大阪と東京のドイツ文化センターで、作者を交えたリーディングが行われる予定。

テアター・ホイテ誌の年間アンケートのベスト作品となったのが、ジビレ・ベルク (Sibylle Berg) の『何も言わない、いわゆるよそ者 (Es sagt mir nichts, das sogenannte Draußen)』(ゼバスティアン・ニュプリング [Sebastian Nübling] 演出、2013年11月23日初演、ベルリン・マキシム・ゴーリキー劇場 [Berliner Maxim Gorki Theater]) で、残念ながら未見・未読なのだが、筋も登場人物も不分明なテキストによるアウトサイダー・コラム風モノローグを、4人の同じような格好の女性の振り付けで示す「悲喜劇」のパフォーマンスという舞台らしい。

大急ぎで日本に目を向ける。2月の天野天街演出、E.T.A.ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann) の『砂男 (Der Sandmann)』(うずめ劇場、下北沢ザ・スズナリ) は、後期ロマン派の夢幻的なグロテスクを、テンポの良い身体動作のリズム感で説得的に提示。

個人的には4月のニコラス・シュテーマン (Nicolas Stemann) 演出、ゲーテ『ファウスト第一部 (Faust I)』(静岡芸術劇場) が白眉で、主要の登場人物3人が、お互いに複数の役を演じるのみならず、それぞれが演じる複数の役を相互にずらしながらシンクロして重ねることによって、役割に分化したドラマの隠し持つ構造のダイナミックスが透けて見えて、周知

と思われた古典作品の中に思わぬ発見を提示する「演出」の凄みに戦慄した次第である。ただし初心者向けではないので、ドラマの簡単な解説などを別途、最初に映像提示するなどの工夫があれば、日本の観客には親切であったかもしれない。

6月には、2008年のミュルハイム劇作家賞で観客賞を受賞したフェリツィア・ツェラー (Felicia Zeller) の『カスパー・ホイザー・メア (Kaspar Häuser Meer)』(小山ゆうな演出、I.N.S.N企画、赤坂エノキザカスタジオ) が、児童相談所の過重労働から来る緊張の精神不安を描いて、再演が望まれる舞台。上演タイトルの「メア」は「メーア」が正しい発音。

12月にはベーター・ゲスナー演出、ヨハン・ネストロイ (Johann Nestroy) 作の『昔の関係 (Frühere Verhältnisse)』と『酋長“夜風” (Häuptling Abendwind)』(うずめ劇場、両国シアターX) の2本が、研究上演を除けば本邦での19世紀ウィーン民衆劇の本格初お目見えである。洗練された機知の状況喜劇、あるいは南洋の人食い文明化パロディーを、倍音のホームイをも使用したドタバタ音楽劇の笑いに包みこんだアイロニーの冷やかさというのは、情緒タップリに目をくらまされがち



うずめ劇場「酋長“夜風”」

な日本では、なかなか貴重な経験であろう。ウィーン民衆劇研究会による詳細な解説と共同訳の載ったプログラムは、資料的価値も高いと思われる。

他の翻訳としては、ペーター・ハントケ (Peter Handke) 『アランフェスの麗しき日々 (Die schönen Tage von Aranjuez)』 (阿部卓也訳、論創社) は、2012年にウィーン・アカデミー劇場 (Akademietheater) でリュック・ボンディ (Luck Bondy) 演出で初演された作品で、劇中劇にしつらえられた舞台上で繰り出される詩的で静謐な対話が、さりげない日常のかけがえのなさを浮き彫りにする。これは6月に京都と大阪で上演の予定。同様に詩的な対話でありながら、むしろ現代の不安を一層強く感じさせるのがデア・ローアー (Dea Loher) 『泥棒たち／黒い湖のほとりで (Diebe / Am Schwarzen See)』 (三輪玲子+村瀬民子訳、論創社) の2作であるが、どちらも2010年と2012年の報告で簡単に触れている。

#### てらお・いたる

1951年生まれ。専修大学教授。著書『ウィーン演劇あるいはブルク劇場』、翻訳『パフォーマンスの美学』(共訳)のほか、戯曲翻訳にペーター・トゥーリーニ、ヴェルナー・シュヴァーブ、ボートシュトラウス、フリッパ・レーレなど多数。



太陽劇団『マクベス』13人の魔女(シャガイエグ・ベヘシュティ、ジュリアナ・カルネイロ・ダウ・ニャ、エウドウ・ブルース)  
撮影: Michèle Laurent

#### 【フランス】

## 太陽劇団の新作、 ストに脅かされたアヴィニオン演劇祭、 若手演劇人の台頭、新しい文化相の登場

小田中章浩

2014年は太陽劇団 (Théâtre du Soleil) が演出家アリアヌス・ムヌーシュキン (Ariane Mnouchkine, 1939-) によって1964年に設立されてから50周年に当たる。この記念すべき年に、同劇団は新作『マクベス』を発表した (カルトゥシュリー劇場 [Cartoucherie]、4~7月・10~12月)。太陽劇団による新作の発表は、2010年の『狂おしき希望号の難破者たち (曙光、Les Naufragés du Fol Espoir [Aurores])』以来、4年ぶ